5. 脳腫瘍の ^{201}Tl-SPECT

大口　学　東　光太郎　関　宏恭
高瀬　秀子　興村　哲郎　山本　達
（金沢医大）

脳腫瘍患者17人を対象として，^{201}Tl 脳 SPECT を検討した．方法は ^{201}Tl 111 MBq 静注後15分および3時間に SPECT 像を得，最も集積の高いスライスを選び病巣部および正常部に ROI を設定し平均カウント比より ratio を求めた．その結果，神経膠芽腫，神経膠腫，髄膜腫では一様に高い摂取率を示した．しかし臨床的に悪性なものまたは治療効果が不良のものは，後期対早期の摂取率の比が1を越える傾向が認められた．また脳神腫の2例，放射線脳壊死と思われる1例ではいずれも摂取率はかなり低い値を示した．現在のところ，^{201}Tl 脳 SPECT は，脳腫瘍の鑑別には補助的な役割しか期待できないが，再発と放射線壊死との鑑別，治療効果判定などに有用性があるように思われた．

6. 術前乳癌におけるリンフォシンチグラフィ（胸骨傍リンパ節転移の診断能について）

道岸　隆敏　中嶋　憲一　油野　民雄
利波　紀久　久田　欣一　（金沢大・核）
小矢崎直博　野口　昌邦　（金沢大・二外）

術前にリンフォシンチグラフィーを施行し胸骨傍リンパ節転移について確認された乳癌初回手術例57症例の58の乳癌を対象とした．患側58例と健常側54例の合計112例のリンフォシンチグラフィーについて評価した．^{99m}Tc レニウムコロイドもしくは ^{99m}Tc HSA を肋弓下の腹直筋内に注射し撮像した．患側12例と健常側14例では，注射部位より上流の全てのリンパ節が描出されなかったので評価の対象から除外した．患側の胸骨傍リンパ節転移陰性の38例と健常側40例でのリンパ節の描出率は上部81％中部63％下部95％であった．上部のリンパ節が描出されないことが胸骨傍リンパ節転移の所見であるとすると，sensitivity は13％, specificity は84％, accuracy は72％であった．

7. ^{131}I-MIBG 大量投与の奏功した神経芽細胞腫の一例

野村　新之　竹田　寛　豊田　俊
奥田　康之　中川　毅　（三重大・放）
堀　浩樹　井戸　正流　桜井　實
（同・小児）

症例は，2歳女児，右副腎原発の神経芽細胞腫で腫瘍摘出後，縦隔や腹部リンパ節，骨髄に転移巣および胸水貯留を認め，種々の化学療法を試みたが全く反応せず急速な増悪を示した．そこで ^{131}I-Metaiodobenzylguaridine (MIBG) 113 mCi 投与したところ，転移巣は著しく縮小し全身状態の著明な改善を認めた．2か月後，転移病巣の再増悪をきたし，再度 ^{131}I-MIBG 100 mCi 投与したが反応はみられず1か月後に死亡した．

化学療法に反応の乏しい再発神経芽細胞腫に対して ^{131}I-MIBG 治療の有用な場合もあると思われた．

8. 術中迅速 RIA が腫瘍摘出確認に有効であった膵鉤部インスリノーマの1例

中村　立子　中島　鉄夫　外山　貴士
杉本　勝也　林　信成　松下　照雄
小鳥　輝男　石井　靖　（福井医大・放）
片山　寛次　（同・一外）

これまで二抗体法の報告のみであった迅速 IRI 測定をビーズ固相法で試みた．キットは栄研の Ab ビーズ IRI キットを用い，インキュベーションは20分に短縮した．測定に要した総時間は30分であった．アッセイ間変動係数 11.4％，アッセイ内変動係数 13.5％ と再現性は良好であり，回収率，希釈試験も満足すべきものであった．本法をインスリノーマの手術時に利用したところ，術前画像診断で存在部位が特定できなかった症例において血中 IRI 濃度の急減を術中に知ることができ，腫瘍全摘のよい指標となった．本法の測定結果は，標準法による IRI 値および CPR 値とよく平行した動きを示し，手術中の迅速 IRI 測定に適した有用な測定法と考えられた．

Presented by Medical*Online